



TITLE:

静脩 Vol. 7 No. 4 (1970.11) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 7 No. 4 (1970.11) [全文]. 静脩 1970, 7(4)

ISSUE DATE:

1970-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65939>

RIGHT:



大学改革にさいし図書館にのぞむ

——“利用者の声”特集号（その二）——

はじめに

本号には前号にもれた部局のかたがたのご意見を集めました。1部局1名の割合でご寄稿を依頼したので、もとよりこれで利用者のご意向を全面的に反映しえたとは思っていません。しかしこの2号にお示しいただいたものにかぎっても、未来の進路にたいしての示唆にとみ、図書館側がふかく傾聴し留意せねばならぬものが多くあると存じます。

次号には、これにこたえる“図書館側の声”が多く寄せられることを期待します。

一 利用者の夢

——情報化時代の図書館とは——

農学部 助教授 北村貞太郎

京都大学図書館は蔵書数290万冊を数える世界有数の大図書館であると聞く。しかし、図書の利用効率からみた有効蔵書数は一体どの位あるのだろうか。

整理の悪い、埃だらけの図書館へコツコツと通い、コツコツと集めた情報だけを頼りにして学問人となれる時代はすでに終わった。今日はこうした古典的労働が電子計算機の助けを借りると少なくとも半分以上に軽減できる時代なのである。情報化時代における民間企業での電子計算機の活用はめざましい。かつての情報センターはこうした世の中の推移を、ただ傍観していてよいのであろうか。京都大学図書館もおそまきながらそのシステムを徹底的に改善すべき時世ではなからうか。

京都大学図書館が名実ともに世界一流の図書館として、日本文化の都に君臨するために次の二つの夢を是非実現したいものである。

1. 日本および世界の文化のデータバンクであること。
2. 図書利用効率の最も高い図書館であること。

第一に京都は日本文化の都といわれるが、日本および世界の文化遺産を徹底的に集積しておくところが日本のどこにあるのであろうか。かつての京都大学図書館は時代に即応してその役目を果たしてきたであろうが、今日のそれはいかかなものであろう。大学において知慧が枯渇するのも無理からぬことではないか。これからの新しい時代には京都を日本文化の中心、いな、世界文化の中核として据え置くためにも、京都人が一致協力して世界一の図書館

館を京都に設置してもよいと思われる。京都国立博物館、国立近代美術館、京都会館、国立京都国際会館などに加えて、学問の殿堂、国立京都図書館がこの都にあるべきではなかろうか。京都大学図書館はその前身でありたいものだ。

利用効率の高い図書館とはこんな風にありたい。

1. 文献相談室へ入る。そこには専門別文献相談係がいる。その人達に必要な文献を口頭で尋ねる。相談係はそれに応じて手元のタイプをたたく。タイプはただちに目的の文献の分類番号をカードとして打ち出す（このときに同文献の在庫の有無も合せて確かめる）。

2. 打ち出されたカードを図書貸出室へ持参し、図書借出カード（クレジットカードのようなもの）を添えて同カードを貸出係に提出する。目的の図書はその後ただちに入手する。

3. 文献複写室へ行く。再び図書借出カードとともに必要文献のコピーを依頼する。数分でコピーを入手し、図書館を出る。

このような図書利用システムはできないものだろうか。図書カードの検索、図書借出カードの記入などは利用者にとっていかに面倒なことか。即座に文献コピーが得られないことはいかに不便なことか。総合科学（農村計画論）を専攻する筆者などが求める文献は非常に広範囲にわたり、各学部図書館に散在している。しかも現在の文献コピーは時間がかかりすぎる。全くお手あげである。

そういえば、2週間ほど前に依頼した文献コピーがいまだに手元に入っていない。もっとも「学問とはのんびりやるもの、それでよいのだ」という教訓かも知れない。

人文科学研究所 助教授 松 尾 尊 兎

京大創立70周年事業とかで体育館が建つらしい。いったい大学とは何をするとところかといいたくなる。学生の肉体的健康のめんどろまでみる前に、もっとさきになすべきことは、いくらでもあるはずだ。ちょうど20年前、この大学に入学したとき、付属図書館は、いずれ増築される予定ときかされた。現状よりも何階か上に重ねるように設計されているというのだ。ところが一向に実現しないのである。

閲覧室は大入満員、いつの間にか教官閲覧室は消滅してしまった。書庫にいたっては論外である。私のように日本の近代史を勉強しているものには、新聞は不可欠の資料だ。京大には、かなりのコレクションがある。ところがこれは、教育学部の裏手にある土蔵の中に保管されている。請求すると係の人は雨が降ろうが雪が降ろうが、重い新聞綴を本館の二階まで運び上げねばならぬのだ。おのずと新聞も傷む。係の人に気の毒で、近頃はなるべく京都府立資料館で見ようとしているが、ここでは種類に限定がある。とにかく早く増築を行なって、新聞などは書庫内で読める設備にしてもらいたい。

どこの部局でも書庫がせまくて困っている。利用度の少ない雑誌などは、皆、先述のお蔵入りである。こういうものも付属図書館に一括収容したらどうだろう。近頃各学部で学生のための研究室をよこせという要求が出ているようだ。こういう声が出るのも一つには付属、各学部とも学生の図書閲覧室がせまいのと、設備がよくないからであろう。

「大砲か、バターか」という古い設問がある。「体育館か図書館か」。常識ある大学人の答えは明らかだろう。「体育館も図書館も」という線で行こうとしているのだ、と大学の幹部諸公はいわれるかも知れぬ。それならば、ことばでなく実行で示してもらいたい。部局の図書館統合の話があるようだが、設備の点はくれぐれも気をつけてやってもらいたい。そして付属図書館の増築も別個に実行してほしい。

「大学改革にさいし図書館にのぞむ」というテーマだが、「大学当局にのぞむ」になってしまった。図書館の人々にたいし、私は何ものぞまない。劣悪な勤務条件でしかも陽の当ら

ぬ場所で黙々と職務にはげんでおられる人々には、ただ感謝あるのみである。

文学部 助手 都出比呂志

図書館改革のために利用者の声が、この欄で、いくつかとりあげられた。それらは、すべて京大内の人の声である。もちろん、京大図書館の改革が問題にされているのだから、それは当然であろう。

しかし、一度京大人を離れて一般市民になったつもりで、ながめれば、京大図書館はどう見えるだろうか。

京大図書館創設の際には、民間から図書寄贈の援助があり、その利用も一般市民に開くという精神で出発したと聞いているが、いまの現実はどうであろうか。

館の利用規定は、確かに学外の人にも利用できる仕組になっている。ところが「部局長の許可が必要」という但し書きがついている。もちろん、「部局長の許可」は一つの「形式」である。この規定を撤廃して、図書サービスを、無統制で、無責任な体制にせよと言いたいわけではない。だがこの「形式」の背後には、案外かなり重い「実質」がかくされているのではないだろうか。

私は、図書館の利用者であると共に、助手として研究室図書利用サービスの仕事の一端を受け持っている。他大学や民間の人が、研究室の図書を利用にこられた時、できるだけ便宜をはかりたいつもりでいるが、それに追われていたのでは研究が阻害される。するとつい、おっくうげな 対応をしがちになる。研究室図書を例にあげたのでは特殊かも知れないが、問題の大小はあれ、この矛盾は京大内のどの図書館にもあるのではなからうか。大学外の人も利用し易く、かつ、便宜をはかる人の負担をも軽くしようとすれば、結局は人員と設備をふやすしかないだろう。図書館「近代化」のためにコンピューターの導入も結構だ。しかし、その「合理化」によって、従事者の人員を減らし、利用しにくいままの帝国大学図書館の現状を固定するのではなく、人員と設備を拡充して、まさに、「大学の外へも開かれた」ものへの改革が必要なのではないだろうか。

化学研究所 助手 植村 栄

図書室といえば入学以来、教養部、各学部の教室、さらに研究室と時と共に利用する場所こそ違え随分とお世話になって来たが、それぞれが中央図書館と結び付いているということ、あるいは全学の図書施設の一部なのだということを感じたのは単行本の受入手続きの度にその本が一時預かりされている時である。随分と時間のかかるものですね。コンピューターをいれて迅速になるものならやって頂き度い。次に感じたこと。古い雑誌の表装、これは相当服をよごすものが時にありますね。貴重なものですから表装し直して後輩のため保存して頂き度く思います。古いものといえばバックナンバー、もっと充実してほしく思います。が、こういうものや学位論文など全てマイクロフィルムに切替えればいいですね。

以上この10年間の経験から具体的に改良して欲しい点ですが、意外と少ないものですね。

こんな小さな点でも実行しようとすれば予算が相当かかるでしょう。大学改革には予算の裏付けが必要な面が多いですが、それ以上に各人の意識が変わらない限り進めない。しかし今回のライブラリーシステムで改善しようという——これを改革というのかどうか知りませんが——実際的な問題の場合はまづ予算の裏付けが一番大切なことでしょうね。予算の額即改善の幅ということになるのではないのでしょうか。大学改革担当文部大臣も留任になったことだし直訴でもしますか。いやこれは大蔵省の問題ですね。館長さん、総長さん頑張って下さい。

理学部には一カ所に集められた学部の図書館というものがなく、各教室がそれぞれ独自の図書室というものを持っています。その教室の“図書室に望むこと”を書いて下さいとのことですが、教室の図書室は私達の研究の場の外にあるとは感じられず、いいかえれば、誰かが管理運営して私達がそれを利用するというのではないと思います。それだから私達のものとして、どのようにそれを運用していくか、であると思います。

現今の日常の仕事は定員外職員が当たっていますが、当教室の図書の管理は、図書係という一人の教官がしていることになっています。私が大学院に入学した頃、雑誌類はすべての教官を回遊した後、図書室に入れられていたので、院生の読むのが相当遅くなることを院会で問題にしたことがしばしばありました。その事や他のことも含めて二年ほど前に図書の利用規則が改良されました。今では在庫の書物を利用するという点で、ほとんど不便が感じられないようになりました。ところで図書室の運営は当然、教室の運営と関係があるわけですが、図書という特殊性が教官、院生、学生の区別をなくす、という点で全構成員の問題であると思います。運営とは、ただ単に今ある書物を管理したり、利用するという事だけに限定されるのは、言うまでもなく、おかしい事で、そのなかにどのような図書を購入していくか、という内容の充実、発展のことを抜かすことはできません。この最後の点においては当教室の場合、十分だとは思いません。それは要求する書物の種類が、研究分野によって異なるというのみならず、各階層の違いによっても左右されます。学生は解説書や教科書的なものを、院生は新しい分野や境界領域に関しての書物を多く望むかもしれません。こういった点での要求が、今は全然反映されていないとは言いませんが、より自然に、また、より早くなされるように考えていくことが必要だと思います。それには各研究単位、各階層からの意見が反映できる図書委員会なる運営組織を作ること一案かもしれません。しかし、何といっても予算が少ないことは致命的ですので、文部省の研究費の増額が、図書の充実、発展の基礎にあたると思います。

あまり勉強もしていず、図書館をひんぱんに利用するなどということから程遠い僕にとって、図書館の改革についてもはっきりした要求は持っていないので、京大、とくに経済の図書館の利用についての感想を一つ二つ。

修士論文の関係で、ロシアの20世紀初頭の農民運動についての文献をかなりさがしてみた。その頃の記録で中心的なものは、「大十月社会主義革命」というタイトルで、1917年3月から10月までシリーズになっているものである。この購入の仕方が不思議である。3、4、5、8、10月の分は経済の方、6、10月の分は法の図書館に入っていて、全くばらばらに購入されている。京都と神田のナウカでどうにか抜けている分を補充できそうだが、購入について、もっと計画的にできないものかと思う。

もう一つ、近頃感じていることは、就職後に備えての事である。京大と東大、一橋などの図書館に大きな蔵書があり、それを利用したい為に、わざわざ籍を残しておいたり、近くの大学を選んで就職する人もいるようであるが、僕の場合でも、図書館で借りている本がなくなってしまうと研究が完全にストップしてしまうのは明白である。うまく、この大きな図書館を利用できる範囲内に就職できればいいが、そうでない場合は……？ 今は、なるべく必要な資料をゼロックスや電子リコピーでとって自分でもつようにしているが、問題は、図書館相互の連絡の形と、その利用の開放性にあるように感じる。

 会 議

国立大学図書館協議会総会 第17回

<とき：昭和45年9月30日 10月1日 ところ：高野山大学>

今年度は本館が当番館となって、76館160名余りが参加して開かれた。第1日は一般的な報告の他、4つの調査研究班「司書職制度」「図書館建築」「図書館機械化」「参考図書の基準」の報告、及び“新しい大学図書館像”特別委員会の報告があった。次いで3分科会に分れて予算・人事・奉仕その他について協議し、この結果は翌日あらためて全体会議にかけて審議を行なった。

第2日の研究集会では特別委員会で提起された“新しい大学図書館像”をテーマとし、(1)その理念、(2)学習機能の向上と相互協力、(3)機械化を中心に熱心な討議が行なわれた。総会を通じて大学図書館をとりまく厳しい環境、その打開への姿勢とともに、現時点の大学改革の波の中で図書館の果すべき役割が大きく浮彫されることになった。

図書館商議会専門委員会 第8回 昭和45年9月16日

テーマ：京都大学附属図書館の機械化計画について

国立大学協会から「大学の研究・教育に対する図書館の在り方とその改革について」（第一次報告）が6月末発表されたが、この報告にも指摘されている図書館業務の機械化の問題を審議することになった。

機械化のうち、コンピューターの導入については、目下図書館事務部で検討をすすめているが、さしあたり、学術雑誌（欧文篇）総合目録の作成について具体化してみたい。しかし、将来図書館にコンピューターを設置するようになったときは、さらに、受入、発注業務から閲覧貸付業務、各種の統計作成業務にいたるまで幅広い適用が考慮されているが、その可能性について検討された。

 ニュース

マイクロフィッシュ撮影装置を本館に導入

文部省情報図書館課では、図書館近代化の一環として、国立10大学の文献複写センターにマイクロフィッシュ撮影装置を導入する計画を立て、さし当り初年度計画として、本年度に5大学（東京、京都、大阪、東北、九州）に対する設備費を大蔵省に要求し、予算化が認められた。

マイクロフィッシュは、従来のマイクロフィルムに替る合理的な資料管理の新しい手段としてすでに定評がある。この装置では、15×10.5 cm 四方のフィルムシートに60ページ（コマ）の撮影が可能で、撮影、現像、仕上り（ネガ）までの一連作業が僅か数分で完了できる性能をもっている。この装置の活用には、マイクロリーダーまたはリーダープリンターの装備が前提となり（本館では未装備）、その普及までにはある程度需要が限定されるにしても、今後装置の普及につれてその有用性が認められよう。なお、稼動までには、整備、仕様、料金設定等のため、当分の時日を必要とするが、始動の暁には本紙でも改めて紹介することにした。

最近受入した参考図書の中から

附属図書館参考掛

- Большая Советская Энциклопедия. 3. изд. 30 томов. Москва, БСЭ, 1970-74.
БСЭ の改訂第3版。約10万項目。索引細目34万。(現在第1巻を配架)。
- Dictionnaire Encyclopédique Quillet. Nouvelle édition. 8 vols. Paris, Quillet, 1968-
約7,000頁, 155,000項目。今秋完結の予定。(現在第4巻Fまでを配架)。
- Encyclopedia Americana. 30 vols. 1970.
- Modern Reference Encyclopedia. 20 vols. New York, Grolier, 1969.
- Encyclopedia of Library and Information Science. 12 vols. New York, M. Dekker,
1968。(現在第2巻までを配架。)
- World of Learning 1969-70. 20 th. edition. London, Europa Publications, 1970.
162カ国の学会, 研究所, 図書館, 博物館, 美術館, 各種大学など約25,000の総覧である。国別に記載し, 機関名索引がある。
- Minerva; Jahrbuch der Gelehrten Welt. 35 Jahrgang. Bd. 1: Europa. 1966. Bd. II:
Aussereuropa. Teil: A-L 1969. Berlin, Walter de Gruyter.
137カ国の大学, 研究所, 専門学校8,500の総覧で, そのうち5,850は欧州外である。国別によらず都市別に記載し, 研究者索引をも附して至便。
- Guide to World Science. 20 vols. British Isles, F. Hodgson, 1968.
本書は世界の科学技術活動(時には社会科学をも含む)の良き案内書である。各巻の表記は,
1英, 2独, 3仏, 4伊, 5ベネルックス, 6スキャンディナビア, 7西・葡, 8瑞・塊, 9近
東, 10欧共同体, 11共産圏, 12中南米, 13日本, 14北・中阿, 15東南亜, 16合衆国, 17カナダ及
び西インド諸島, 18豪・ニュージーランド, 19南阿, 20インターナショナルサイエンスとなっ
ている。
- Statesman's Yearbook. Statistical and historical annual of the states of the world
for the year 1969-70. 106 th. edition. London, Macmillan, 1969.
- Dictionary of Scientific Biography. 12 vols. New York, Charles Scribner's Sons,
1970-。
これは古代より現代にいたる世界の科学史と科学者の事典である。アメリカ諸学会評議委員会
(ACLS)の企画編集による。哲学者思想家をも含んで約5,000名を原資料ないし原典によって解
明する。(現在第1巻を配架)。
- Dictionary of International Biography. 5 th. edition: 1968-69. London, 1968.
- International Who's Who. 33 rd. edition: 1969-70. London, Europa Publications, 1969.
- Who's Who. 121 st. Year: 1969. London, Adam and Charles Black, 1969.
- Who's Who of British Scientists 1969-70. London, Longman, 1970.
- Prominent Personalities in the USSR 1968. New Jersey, Scarecrow, 1968.
- Who's Who is Science in Europe. A new reference guide to West European
scientists. 3 vols. Channel Islands, F. Hodgson, 1967.

あとがき:『静脩』発刊の主旨は「利用者と図書館とのコミュニケーションをはかる」ことにあった。しかるにこれまでの『静脩』をみてくると, “利用者の声”は比較的よくのせられているが, これにこたえる“図書館側の声”がみられない。すなわち一方通行であった。この弊をあらため, ぜひ発刊本来の主旨を実現したい。

次号には, 「『大学改革にさいし図書館にのぞむ』を読んで」ということで, “図書館職員の声”をあつめてみたい。乞う, 職員諸兄よ。この意を了して, おおいに原稿をよせられんことを。

おわりに, 本号にご寄稿いただいたみなさまならびに, 原稿を集めるにお世話ねがった職員のかたにあつく感謝いたします。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 7, No. 4 (通号37号) 1970年11月15日発行・編集発行人:
岩猿敏生 発行所: 京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111 (内線) 2220~2238